

# 指 畫 雜 說

田 中 喜 作

## 一

筆に代ふるに指頭墨を蘸して畫を爲る、是を指頭畫或は指畫、指墨また時に手畫と稱してゐることは周知のこと、古來是を試みて縑素に奇手を弄ぶもの、和漢共に指頭墨戲、指頭生活等の題款を以てするを常とする。王士禛の香祖筆記には王秋山なる者、工に學畫を爲ると云ひ、人物、樓臺、山水、花木、皆指甲及び細針を以て學出すること、辭典に學は攤なりと解して、其の二字の出典を明にし得ないが、また指畫なりとする。然し其の用字、用語の如何は兎もあれ、孰れは鄒一桂の所謂畫の筆を用ひざるもの、道の正派に非ずと云ふも亦妨ない。かの池大雅の逸話、即ち彼嘗て人の爲めに試みたが、伊藤介亭座に在つて、賞賤久しうして後、窮郷僻邑、筆の乏しきに當つてや亦寶とすべしと揶揄一番したのに、大雅之を聞いて大に慙ぢ、爾來復此の技を試みなかつたと近世叢語に傳ふる如き、果して此の事實あつたか否か、少くともこゝには多分の潤色を経て居ることを知るが、而も

尙一面に好んでなすべきでない奇畫の一種であることを證する。

抑、畫史を閱するに奇畫を以て目すべきもの極めて多い。歷代名畫記には秦の列裔、口に丹墨を含んで壁に向つて噴き、龍獸の形を繪いたことを説き、また後漢の張衡が福建省某山の奇獸、豕耳人首、狀貌醜怪の駭神を寫すに當つて、潜に足指を以てしたと傳へて、巧者は止に手に於て思ひを運らすのみに非ず、脚も亦心に應ずるなりと云ふ。其他醉後髻をもつて墨をとり、絹に抵りて畫いたと云ふ王默乃至首足を以て濡染抹踏したと云ふ王洽等、正しく書字に於ける張旭と傳説を等しくするもの。是等何れも皆奇畫として古く傳へ説かれたもので、湯屋の畫鑑に、五代の陳容畫龍を得意にし、墨を潑いて雲を成し、水を噴いて霧を描くと共に、時に巾を脱して墨を濡し、手に信せて塗抹したと云ふのも、即ちまた默、洽の亞流、其の事實の有無必ずしも問ふを須ひぬと共に、また默の如く、一介の風狂兒なりせば、是あるも訝しむに足らぬ。然し此の間にあつて特に傳説的なるは唐朝名畫錄の張璪が一手に双管を把つて生枝枯枝を描いたと云ふもの、却つて筆

を以てするものながら、五筆和尚の傳説と共に、寧ろ奇畫の名に背かぬ。

而して吹雲、彈雪、潑墨等の諸法に至つては、寧ろ一部局の上に手法的な奇工を弄して、今日尙我々も其の遺法をそれぐ水墨畫乃至繪卷の一部面に見るものながら、名畫記以來畫の邪道とするもので、小山畫譜は水畫、火畫、漆畫、繡畫と共に畫の筆を用ひざるもの、皆正派に非ずとする。其他畫繼の李覺、醉後絹素を壁上に貼し、墨を潑いで、あるがまゝに諸象を描出したと云ふ如き、同じく潑墨の法ながらも、稍其の體を異にして、これこそ寧ろ奇畫中に數ふべきであらう。

而して水畫は蚤に酉陽雜俎に范陽山人なるもの、筆を池水上に縦ち、二日を経て緞絹を以て掲するに、古松怪石人物屋木備はらざる無かりしことを記し、繡畫は所謂宋繡刻絲として、其の精巧を歷代の雜著に錄すること多きもの、而して火畫、漆畫に至つては、前者と共に近世和漢にも傳へて、また言ふを須ひない。斯く數へ來らば香祖筆記の紙を破いて條となし、山水人物花鳥を織成する閩中の織畫をも擧げなければならぬが、特に其の奇甚だしきものに至つては、金玉瑣碎に記した湯鵬の鐵畫、即ち鐵を鍛へて畫を爲し、肥瘦陰陽筆畫と相似て、絶えて俗意無しと云ふと、汪氏珊瑚網畫繼に楊惠之が泥土を塗つて凹凸を作り、墨を以て暈染して峯巒林壑を成すと云ふ影壁の如きをも見ることが出来る。若し斯く一々に擧ぐれば既に文晁畫譚異畫の條に擧げたる四、五の遺例をも説くべく、また是を本邦に求めば今物語の燒繪以來特異なる數々の奇畫をも見やう。然し如上風狂の徒がたまゝ醉後興

に乗じて奇手を弄ぶもの乃至繡、鐵、塑泥等の全く異質の圖寫を成すものを外にして、史上に名だたる、畫師が時に絹素に臨んで其の一部或は全局に筆ならぬ異物を以て、一種特殊なる効果を求めて畫を完了するものも少くは無かつた。

たとへば洞天清祿集に米南宮、墨戲専ら筆を用ひず、或は紙筋を以てし、或は蔗滓を以てす、皆畫を爲すべしと云ふが如き、即ち金冬心が論畫雜詩に蓮房蔗滓都收用と云ふもの。また松齋梅譜に僧牧溪が蔗查中結を用ふること多しと説くが如きも亦それである。而して其の蓮房を以てするは、今容易く考へ難いが、蔗滓と云ひ蔗查中結と云ふは、明に本邦の藁筆の先蹤をなすもの、而して紙筋に至つては郁氏書畫題跋記に、家に海岳菴圖を襲藏して二米の筆法に親しんだ陳道復が、紙に墨を蘸して雲山を畫きしと云ふ文彭の題跋をも錄すると共に、嘗て脇本樂之軒君が指摘された前田家藏默菴四睡圖の樹法にも是を見る所、恐らく物に拘らぬ僧畫等に於ては、一種の効果を求めて是を試みたものも多かつたであらう。而してこゝに云ふ指畫に至つては、若し是を廣く見れば所謂手足を以て抹踏濡染する一種風狂兒的な手法にも近いが、而も是を狭く見る時寧ろ後者の一群に類して、筆の能く至り難い處を求むる奇工の一種と見ることも可、予がこゝに言はんとする所また此の狹義に於ける指畫に外ならぬ。

そも、所謂指畫果して誰人の墨戲に創まるか。山靜居畫論其他斯の畫を説くもの何れも是を唐の張璪に歸するが、そは歷代名畫記に彼を傳して或は手を以て絹素を模すとあるに依る。恐らく文献に依據

する限り此の説は誤らないであらうが、唐朝名畫錄はまた韋偃を説いて山は墨を以て幹し、水は手を以て擦せしことを記す。風狂兒を傳ふることの多い彼の土に於ては爾來畫道に於て此の種の奇工を弄したるものも尠くは無いであらうが、歷代多數の畫錄殆んど斯に及ぶものが無い。或は宋代以降水墨畫の盛んなるや、其の一部局に斯の手工を加へる如き敢て珍とすべきものが無かつたのかも知れぬ。其の上唐代の皴、偃乃至其の亞流の如き、志

高其佩筆九如圖

款印

そも、其佩指畫の跡、從來舶載せらるゝもの必ずしも無かつたとは云ひ難いが、その何れもが彼の款記を有し、また一種特異の風格を見ながらも、概ね粗笨の技を弄するもので、正しく彼の跡として全幅の信賴を寄せ難かつたが爲

すところ一に淋漓意を恣にするにあつたので、方薰をして吳偉、汪海雲の輩皆其の遺法と云はしめたのも肯ける。それだけ彼等の爲すところ指頭の墨戲に新たな意義を求めて是れに専らなるものでは無かつたに相違ない。

然るに清代に入つて我々

は始めて斯の技に意義を求めて専らなるもの、高其佩の出づるを見ると共に是に追隨するもの漸く多く、國朝畫徵錄をして近日指墨甚だ衆しと云はしめるに至つた。香祖筆記に謂ふ所の王秋山の如きまた康熙の人、恐らく彼の亞流の一人と見るべく、彼こそは正しく指畫の創始者と云ふも可である。

めに、自ら我が國の文献にも從來一も彼の特技を傳ふるものなかつたが、近時彼の九如圖の一本故阿部屋次郎氏の藏有に歸した。其の作すところを観るに、墨漬宛ら背に徹するものありて一種重厚勁拔の畫致、よく其の名の實に背かぬを見るものあり、本誌本號初めて

是を收めて圖版とし、弘く彼の奇工を傳へるに當つて、聊か其の特技に就いて述べること、また必ずしも徒爾とすべきでは無い。たゞそれに先つて一言すべきは此の技早く我が國に入りて初期南宗畫の諸家の如き、多少とも是れを試みるものは多かつたが、今殆ど絶滅して其の技の如何を知ることすら難い。随つて高其佩の技の如き、尙更單に其

の畫跡をのみ鑑して、却つて其の手法を知るを得ないが、幸にして、彼の技法に就いては其の從孫高秉字青嶠號象叟が少時彼に従學して親しく爲す所を觀、其の畫法逸事を遺記せる指頭畫說の版行せられたものがある。不幸にして本書一本は寧ろ其佩の指畫に就いて、最高の讃辭を綴るに終始せるもので、技法の巨細に就いては、多くの彼の土の遺著に見る如く、隨筆的な記叙を試みるに過ぎないが、また稍々其の如何を知るに足らう。

高其佩字は韋之、且園と號し、また一號南村、遼陽の人で官刑部侍郎に至つた。當代に於ける一種の志士高天爵を父として其の第五子に生れ、長兄其位は文淵閣大學士に至り、何れも詩文を能くした。此の環境に生ひ立つた彼は幼齡八歳にして初めて畫學に志し、爾來稿に遇へば撫積すること十餘年、遂に二麓に盈つるものがあつた。後指畫を得意として聲名天下に遍く、晩年禁闕に召されたこともあつたが、雍正十二年、我が享保十九年、享壽七十を超へて病歿した。そして彼が初めて指畫を試みたことに就いては指頭畫說に一話柄を傳へる。即ち彼壯年に及んで尙未だ一家を成すことを得ないのを常に恨としたが、一日倦んで假睡せしに、一老人の導いて土室に入るを夢みた。室は畫壁を周らして理法具備するものがあつたが、室中空々、僅に一盃の水があるのみで、一墨斷紙の撫仿に便するものが無かつた。爰に於て水中指を蘸して是を習得し覺めて大に喜んだが、而も筆を把るに及んで復悶々の情に堪えず、偶指頭を以てするを憶うて是を試み漸く其の神を得るに至つた。彼が筆を廢するに至つたのは實に是れに職くと云ふも

のそれである。我々は此の一話柄の餘りに傳說的なるを以て、故らに夢に假託せるものと考へる必要は無いと共に、其の事實の有無を問ふことを要しない。少くともこゝには彼が筆の却つて工細に失して意を寫すに適しないのを慮つて、其の桎梏から離脱せんとした努力があつたことを知れば足つて居る。後彼が一印を刻して『畫從夢授、夢自心成』とした後の四字また逆には是を語るものに外ならぬ。かの國朝畫徵錄、桐陰論畫等が、何れも其佩の年漸く老いて、指頭を用ふること却つて揮灑に便なるが爲めに、遂に復た筆を用ひざるに至つたと云ひ、また小山畫譜が本と筆畫を工にせしが應酬に苦しみ、乃ち變じて指畫を爲せりと云ふ如きは、理論的にも容易く受け入れ難いもので、彼を誤ること極めて多いものであることを注意しなければならぬ。而して彼の畫法や如何、以下畫說一本に散説する所、彼此相綴ると共に、一家の解釋を加へて、是を説くこととする。

彼、紙絹に臨んで奇工を運ぶに當つて、常に大、無名、小の三指を用意し、概ね指肚を墨に蘸して、是を運用する。そして冊筆手卷乃至横披等の小品には概ね無名指、小指互用するを以て足れりとしたが、大幅に至つては必ず兩指並び用ひ、若しまた鈎雲流水等を描くに當つては三指同時に並用するを常とした。其の熟達せる運用は大小三指に依る細太濃淡さまざまの墨線を描出して、頭緒亂るかと思はるゝ間に、却つて板滯の病を避くるを得た。點苔を施すことまた概ね同工、或は二指、或は三指、以て大叢苔棘に及ぶのである。そして多くの場合細勁の墨線を行ふには指甲の内腔に墨を掬ひ、宛も我々の洋筆を以てする



やうに、甲背の尖端から汁墨を流出せしめるが、時として其の細きこと髪之如く、其の鋭きこと鍼の如きものがある。此の境地に至つては到底筆の能くする所では無い。たゞ指甲は常に長きに過ぎてはならぬ。指に碍あるが爲めである。是に反して禿に陥つては指に助けを缺く。實に指甲將に禿せんとして、未だ禿するに至らない時を以て最も佳境とするのである。然し太線に至つては多くは兩指肚に依るので、時に大指を交へて急掃する邊、寔に神技に近い。かうして彼が一幀の畫跡を完成するには常に甲肉交々運用するので、たとへば幾條の柳枝風に靡く所、多くは兩指肚を以て足れりとするが、小點は専ら指甲に依るやうに、人物、寫眞等に至つては、肉、目を描く時、睚眦の類は必ず指甲の助けを借るが如きであると云ふ。

高秉はまた彼が寫梅の法を説いてゐる。彼は常に無名指の肚を以て墨を蘸し梅瓣を點出するが、指端の一點して未だ放たず、而も半ば放つもの墨稍濃く、全く放了するもの漸く淡く、指に信せて點去するに、時として中空宛然一黑圈をなすものすら見るので、こゝに梅の全神自ら備はると。

彼は弱冠の頃より筆に依つて先賢諸家の跡を撫仿し、専ら畫理の如何を究めることに努めたが、指畫に一家を成すに至つても彼は是を改めなかつた。元來筆を以て指を倣ふことの難い如く、指、筆を倣ふに難いことは云ふまでも無い。然し彼は齡七秩に近づいても尙撫仿の作に指頭を運んで兀々として倦むことが無かつた。嘗て指墨を以て宋元十二家山水花鳥冊を撫仿したことがあつたが、是を見るに用墨迥に殊

なるものがあるが、神氣に至つては一々酷肖するものがあつた。正しく先賢の理法の心に融會するが爲めであると秉は説く。そして一轉李龍眠の法を試みしを語るに至つて、尙し龍眠復た起たば必ずや未だ指を用ひざりしを悔いんと説く邊、最も讀者をして失笑を禁ずる能はざらしめる。

彼に絹本の作の多いことは云ふまでも無い。そして絹の生熟に就いては高秉も是を説いて居ないが、然し紙上畫を爲す時、彼は決して摺紙を用ひなかつたと云ふ。勿論此の摺紙を捨て、生紙を賞用すると云ふことは、一に墨色の浮薄を避けるが爲めで、米元章に既に其の傳あり、近世南宗家また擧つて試みたところ。嘗て陳舒が好んで熟紙を用ひたのを、是れ其の短所と評された如く、單に彼一家の特色ではないが、秉が語を繼いで摺紙指畫を作る可しと謂はゞ大に謬ると云ふのを見ると、指畫の特技が尙更摺紙に適しないのを想はしめる。同時に彼は宣紙用ひることが無かつた。人の若し宣紙を以て畫を乞ふものがあると、彼は必ず吾が畫は粗品、宣紙を汚すべきでないとして、時紙を以て是に代へたと云ふ。こゝに宣紙と云ふもの、云ふまでも無く安徽宣城の産紙、芥舟學畫編に細膩光結、今時の極品に屬するが、但だ柔順餘ありて剛健に足らずと云ふが如く、生紙の指墨に適し難いのは容易に想像し得るが、時紙に就いては明に知ることは難い。何れは當代通用の紙の意で、近日の灰重く水性多き時紙は則ち紙中の奴隸と芥子園畫傳が云ふもの即ちそれであらう。要するに指頭濃墨を驅使して尙碎裂に至らないのを採るに外ならぬ。

秉はまた云ふ。凡そ畫は用墨設色何れも輕と淡に宜しく、重と濃とを思むことは云ふまでもない。これ輕淡なれば清秀、濃重なれば濁俗に陥るが爲めであるが、然し指畫紙本の作に至つては自ら濃重ならざるを得ない。若し一たび水を加へるなら直に紙質穿透するが爲めに到底輕淡を望むことを得ない。墨氣既に濃重なれば設色のまたは是に稱ふを要すること云ふまでもないが、指畫の困難なる實にこゝに源づく。

たゞ絹本冊筆の作に至つては容易く墨中水を加へることが出来るので、氣味極めて輕淡、稍別手に出づるが如きものがあると。

以上を要約して考慮する時、こゝに指頭畫家の墨戲を制約する二三の條件が自ら注意される。其れは既に説いた如く用紙の碎裂を慮つて、故らに濃墨を驅使するを必要とすることも一であるが、二は指甲の將に禿せんとして未だ禿せざる時を以て最も佳境とすることである。そして其の三に至つては筆畫の作に比して極めて奇なる事實で、自ら前者に派生する制約である。即ち一たび禿するに至つた指甲が、其の佳境を再びするには當然或る時日を待たなければならぬこと等である。是等の中第一の制約に就いては、後に本誌所收九如圖に説くに當つて自ら觸れることであらう。其他二の制約に就いては、高秉は明に是れを説いて居ないが、其佩の畫生活の習慣を語る一節は、少くとも半ばはこの事實に關聯するものと思はれる。

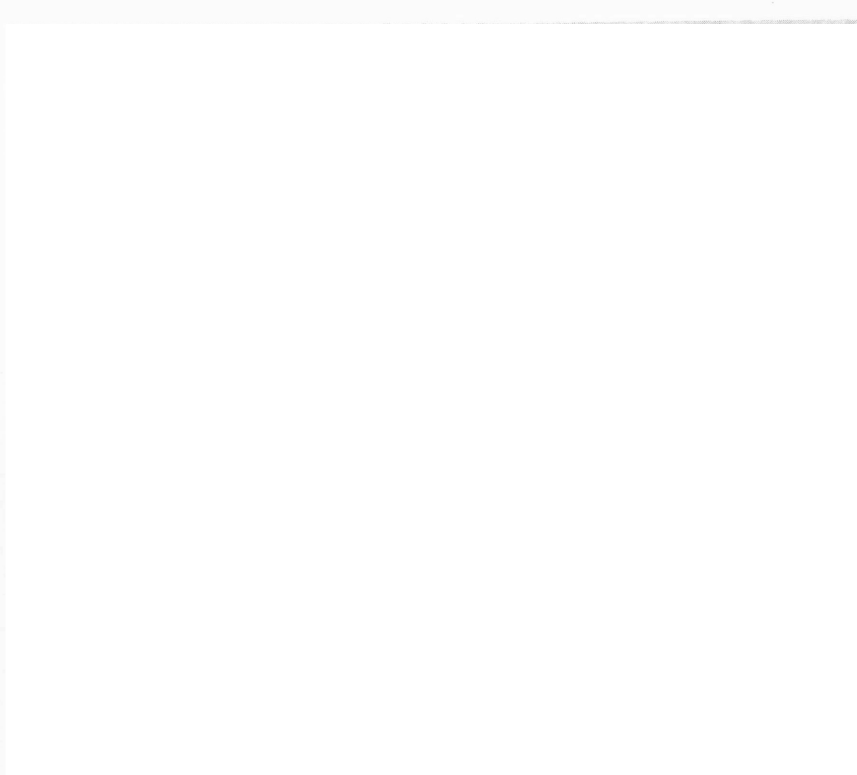
彼は云ふ。其佩指畫の聲漸く高く畫を求むる者虛日無かつたが、是れが渾灑に當つて、彼は常に紙を積むこと四五十番、輒ち先づ一日墨を磨り、已より西に至るまで指頭を運ぶので、斯くすること約ね月二次、

毎に甲の禿するに先つて細畫人物花鳥を畫くこと數幅、後漸く禿するに及んで潑墨山水及び屏障巨幅人物龍虎の類を描くを習ひとしたと。

秉は尙語を繼いで其佩の多作を説いて云ふ。一日四五十番、月約二次なれば、百幅に至るべく、即ち歲に千餘幅、弱冠より七旬に至るまではを通すれば恐らく五六萬幅を下らないが、此の多作は千古能く京しきを得たもの無いであらう。其の上興來らば、時に或は畫扇三五柄、手卷一二軸、尙帖冊に及ぶが、是等は皆大幅の外であると。また指畫多きに過ぐるに至つて、到底自ら親しく烘染することが出来ないので、遂に人を倩うて代染せしめるに至つたことをも説いて居る。是等に至つては從孫としての秉の故らに彼の爲めに潤色するところが極めて多いのでないかと思はれる。たとひ一世紀を超えるものがあつたにしても、既に桐陰論畫が其佩の作、流傳するもの絶だ少しと云つて居ることによつても推定すべく、秉は恐らく其佩が晩老の畫生活を以て壯時にまで及したのであらう。

然し此の遺記にどれだけの潤色があるにしても、少くとも彼が晩老に及んで、一日四五十番の絹素を染めたと云ふ程、多作の人であつたことを知ると共に、今一步を進めるなら、此の多作に依つて、また其の多作の間に、指頭漸く熟して所謂佳境を捉へることが出来るのであるかも知れぬ。同時にまた多作は濫作をも結果したであらう。斯うして從來我々が經眼した諸作の間に、粗笨陋雜を極めたものの如きは、恐らく偽跡の流傳かと見るも妨げぬが、嘗て日華展覽會出陳の紙本、歲寒三友圖大横披の如きに至つては果して如何。當時まだ其佩の正筆

として準據すべき遺品の流傳なく、多くの史家に依つて偽跡の一か  
と鑑されたものであるが、今にして思へば或は正蹟中の下品の一でな  
かつたか。畫上に鈐した指頭畫三字の朱文方印が、以下に述べよう



高其佩筆 歲寒三友圖 上海白石三六郎氏藏

る九如圖の一印記と同一であること亦是を證するものである。無論其  
の作、云はゞ等しく粗笨の技に終始すると共に、畫趣平板、氣格淺俗、  
たゞ一種つまじい粗獷の致を感せしめたが、而も尙多少の好感を禁

じ得ないものがあつた。然しそれに比しては本誌所掲の九如圖は恐ら  
く其佩得意の作でなかつたか。秉の云ふ所に依ると彼の作中、絹本の  
親ら烘染するものと冊筆手巻とを神品とすると。此の圖果して親ら烘  
染したか否かを知らぬが、正しく絹本、烘染に堪えない生紙紙本の前  
者が平板淺俗なのも當然で、即ち多作濫作中の一本であらう。予は今  
九如圖に彼の爲した所を見ることとする。

圖は解説するまでもなく詩の天保九如で、彼我の畫跡に屢々見るも  
の。自ら款して『九如圖、戊子八月一日長白山人其佩指頭生活』とし、  
また指畫に依ることを明にする。年次に就いては明かでないが、其の  
老熟の跡を見ると恐らく晩老の作と思はれ、康熙の末或は雍正の作で  
あらう。而して題跋者莽鵠立は滿洲旗人の出で、世宗の朝都統に累進  
したが、傍ら卓然と號して寫照の技に長じて居たと云ふ。殆んど其佩  
と世代を同じうした。構想に就いては必ずしも奇趣を見ないが、平滑  
な絹上、指頭を運ぶに、先づ淡墨を以て一過し、後徐に濃きに及んで、  
最後に此の長條の全圖に濃墨を以て擦過して殆んど遠近をすら意に介  
しないもの、やう、彼は恐らく墨の濃淡を以て遠近を分たず、運指の  
繁簡を以てするのであらう。而も岩石、雲煙或は雜樹、峯巒を層々と  
累積する邊に、彼が一種特有の畫理を解せることを觀取し得る。従つ  
て其の細部を見ると、多くの畫傳が是を推重し、また高秉が口を極め  
て彼の作る所皆生平經歷の山川眞境であると云ふ如く、凡て寫生に出  
發してゐることは、下半雜樹雲煙を寫す邊に特に明かに是を示してゐ  
る。彼は是等の雲煙雜樹を果して三指并用したか、二指互用したか其

の何れを明にし得ないが、或は指甲、指頭を以てし、或は指側をすら交へて、墨痕錯雜、實に亂るゝに似て而も板滯の弊なく、よく幽深の致を傳へ得たのは最も多とすべきで、指畫に出で、正に筆畫の壘を摩し、而も筆の能くし得ない一種の重厚剛勁の趣を横溢せしめて居る。傳記者の多くが彼の筆畫を推重し、筆畫に拙くして獨り指畫を善くするものは無いと云ふのも肯けると共に、こゝに至つて彼も亦一箇近世の畫宗であると思ふなければならぬ。

## 三

其佩の指墨の名漸く世に籍くや、是を追隨するもの甚だ多かつた。

高秉の指頭畫說中にも其佩親しく烘染するの暇なきに至つて、陸日爲、袁文濤、沈禹門其の他彼の爲めに代染するものがあつたことを説くが、是等の諸畫師は恐らく彼の直門として、同じく此の技を弄したものであつたであらうが、其の他別に各々一旗幟を所在に樹立するもの、尠くはなかつたことは、當代以降の畫傳に録する所多きによつて知ることが出来る。而も其の餘勢は遂に本邦に流傳するに至つたが、果していつ誰人の先づ指を染める所となつたのであらうか。元來此の種の指頭を濃墨に汚して畫を作る如きは、到底潔癖なる我が邦人の好んで爲さざる所で、當代以前に於ては一も此の種の奇技を試みたものが無かつたやうに、是れが流傳を見たる後に於ても、畫壇の先覺中時に是を試みたものが多いにも拘らず、是を文献の上に見ること極めて稀であ

る。其の上遺品の款記にも、早期の作中には一も年次を示すもの無く、隨つて其の流傳の年代如何も是を明かにすることは難い。然し既記伊藤介亭の一話柄によつて、本邦指頭畫を云へば必ず先づ其の人を想起する巨家大雅の畫作に就いては、略其の年次を推定せしめるものがある。それは南海先生後集に收めた『贈九霞山人並引』の一篇である。同集は既に活版に附されて、世に行はれて居るが、元、和中金助氏の收藏に係かる南海自筆稿本に依る同氏の私板に出で、流布弘からぬ恨みがあるから、今其の全文を擧げると

余曾聞九霞之名、想見其人、今年自洛來、訪予於紀水北渚、一接之、即識雲外鶴標非俗塵中之人、既而覽其所畫指墨者、倍歎其奇、畫蓋不<sub>レ</sub>用筆刷、指端染墨、淋漓縱橫、隨意掃去、花草翎毛、人物竹樹、一揮即成、彷彿真趣、大有雅致、抑亦一世之絕技也、昔者狂僧筆塚中山之族爲之泣矣、今也散人以指代毫、覓其必棼舞矣、散人好遊、芒鞋蓑笠、路已遍名山、此去將問三山、予想其曾中烟霞與江山相謀者、其奇豈可計哉、遂賦二絕、餞其行云(七絶一篇是を略す)

と、其の引を記して居るのである。そして南海は此の一篇に年紀を加へなかつたが、同集中次に收めた一篇、即ち九霞所藏の元信筆瀟湘八景圖軸を借覽して圖後に書したと云ふそれに、庚午季冬の年次を誌す。即ち寛延三年に當つて、何れも大雅が初めて南海に謁した時の作に係る。畫師正に二十八歳の冬である。其の上こゝに特に注意されることは前記の引を通讀すると、南海の如き初期南宗畫の先達すら、まだ指墨に熟して居なかつたことも推定されて、此の寛延三年の年次は本邦指墨に於ける最も早期の一例であると思ふべきであらう。

然し斯くは云つても大雅其の人が我が邦指畫の創始者であつたとは到底考へ得ない。無論當時の京畿には既に其佩一派の指墨が舶載しなかつたとも斷定し得ないが、其の流傳の經路を考へるなら、單に畫蹟の舶載にのみ歸するよりも、寧ろ當時海西に來舶した清人中に是を試みるものがあつて、誰人か、斯法を傳習せるものと推定する方が合理的である。こゝに想起されるのは藤貞幹が龜玉これが祖をなすと云つたことである。予はまだ黒川龜玉の指畫なるものを見ないが、當代のあの種の人物として、當然彼も試みたであらう。従つて斯説は一應極めて合理的に思はれるが、然し大雅の寛延三年は龜玉僅に十九歳、彼が六年後廿五歳の青春を以て物故しながら、南蘋様式の流傳に一役を負うたほどの騏驎兒であつたにしても、彼が先鞭を着けたと云ふことは容易に考へ得ない。

それよりも柳里恭こそ或は一步を先んじた人ではなかつたか。斯く云へば讀者は寧ろたとひ彼が嘗て墨竹を得意にして、一意蕭散の體を學んだにしても、晩年あの鮮麗巧緻な畫致に入つた郡山の大夫が、平然と指を濃墨に染めたことを訝かるかも知れぬ。予の如きもまた未だ親しく柳里恭の指墨に接したことは無いが、梁田蛻巖集後篇に『觀郡山柳公美指畫竹歌』の一篇を載せ、指爲毛錐工墨竹、翻手覆手電相摩、食指將指如擲梭、須臾描成碧琅玕の句がある。彼はまた時に指頭もて墨竹を試みたのである。たゞ同集後篇は前篇を寛保二年に板行して後、寶曆に互る作を集めたもので、此の一篇の年次は是を明にし得ないが、而も寛延三年は彼にとつて既に晩老に近いと共に、淇園と大雅との關

係より考慮しても、大雅は寧ろこの人に追隨したのでなかつたか。

それにしてもまだ我が邦指畫の源流が淇園に出づると斷定することは難い。何となればそれは流傳の經路として稍と不合理を感ずるが爲めであるが、さればとて彼等南宗派の大先達、南海の試みなかつたことが明かである以上、南郭、蘭嶠の徒にも、どれだけ蘭竹の墨戲があつたにしても、恐らくこの奇技を試みたとは思はれない。かうして若し畫道に於て大雅に一日の長を有した諸畫師を考へるなら、海南に生れて寧ろ保守的であつた高陽は到底此の技に入らなかつたであらうし、平安四竹に至つては知らるゝ所餘りに尠い。とすれば或は彭百川こそ其の人でなかつたか。予は此の意味に於て最近百幀に近い百川畫なるものを佐々木昌興氏の收藏中に展開して、遂に此の人の指畫の一點をも見出さなかつたが、あの孟浪を敢てすると云はれた百川、只管志を南宗に傾けて凡有ゆる畫體に暗中摸索をつづけた百川、而も最近相見香雨氏に依つて發表された如く、延享二年に長崎圖を描いたこの人が、或は當時長崎に遊學したのでないかと考へられるなら、尙更予は彼こそ其の人でないかと想像したい。百川と大雅との關係は今日まだ想像以上に是れを證するものは無いが、あり得たとして誤るところは無い。而して蕪村は如何。予はまだ彼の遺品のうちに題款して指畫なることを明にするものを見ないが、彼も亦壯時其の作を爲したのでなかつたか。彼の畫道に於ける第一步には多少狩野派を學習した跡はあるが、要するに詞餘の戲墨に出發したものに過ぎないもので、殆ど筆格を無視して、指墨に近い遺品の幾幀かを見るより云はゞ、彼にも恐らく此

の作があつたのであらう。

爾來此の奇工は誰人の傳承する所となつたか。名だたる、畫師群中に、我々は紀南の草堂寺に蘆雪晩期の作人物圖二曲屏があるのと、『小峯城逆旅偶筆』によつて文晁が壯時是を試みたことを知る以外には、僅に芳中の遺品があること位を知るのみで、其の他に就いては殆ど遺品の偶目する所は無い。無論近時に至つても時にしがたい畫會の席上揮毫に、または時として路傍の一角にすら、貝原某なるものが試みて行人の脚を止めたことを知るもの、尠からぬ如く、名も無い工人の曲描きとなつて残つた。無論他の一面には蘆雪、文晁のやうな霸氣縱横の徒の、一時の墨戲ともなつたことは多いであらうが、多くは是を潔しとしなかつたと共に、自ら其の遺品の流傳するものが少いのであらう。かうして一代の巨家大雅が介亭との一場の挿話に、爾來自ら慚ぢてまた此の墨戲を試みなかつたと傳へるにも拘らず、一家の格を大成して後、尙萬福寺障屏に五百羅漢の一大作を遺してゐる以外には、幕末に至つて高秉の指頭畫說一本が翻刻發售されたのを見ることを、僅に珍とせられるに過ぎなかつた。

予はこゝに一應我國に於ける指畫の手法に就いて、數行を費しておくとする。元來高秉の既記の一本は、乾隆三十六年、王朝翰の序及び著者の自跋ありと云ひ、恐らく當年の撰述に係るものと思はれる。美術叢書所收本及び昭代叢書本とも此の序跋を逸し、後者にのみ却つて吳江沈氏の跋を收めて居る。予は此の二本以外に來鶴堂刊本なるものを見て居ないが、當年の撰と見て誤はない。乾隆三十六年は正に我が明和六年、其佩逝いて四十年の後、而も斯法の我に流傳したのは少くとも尙二十餘年を溯つて、其佩遠逝

後幾干もなく早くも其の追隨者によつて傳へられたのである。それだけ其の技法が斯本に負ふ所があつたとは考へられないので、恐らく末流の畫師か、さうでなければ偶々時に臨んで試みた文字通りの墨戲に發明する所があつたに過ぎないであらう。それかあらぬか、其の爲すところを見るに、何れも花卉翎毛の類に草々の指頭を運んで簡單な圖様を試みるもののみである。偶々大雅の障屏のやうな、恐らく其佩の跡にも見ることは無かつたかと思はれる一大作があるにしても、要するに線描を主として、簡素な體様に終始するものである。それだけ其の手法も亦指肚を用ゆること多く、指甲の運用に待つものも彼の如く線描の細勁を見るものは絶えて無いと共に、用紙も亦屢々熟紙を用ひて居るやうに思はれる。是等の點より見て我邦指畫は斯法に就いて云ふ限り、極めて幼稚の域を脱することは出来なかつたと云ふべきであるが、而も潔癖な邦人が故らに斯法を試みた意義は是を以て足れりとしたのであらう。然らば果して其の意義如何。

#### 四

指墨は要するに奇工である。畫道の正派ならぬ一時の墨戲である。時下つては其の及ぶところ路傍の曲描きにまで墮したのも偶然では無い。斯うして過去の彼等畫師群が既に是を潔しとしなかつた如く、我々の史學の本道より云へば、または是を潔しとすべきで無いかも知れぬ。而も尙更此の技の流傳の跡を釋ねて其の先蹤の如何を顧る如きは、要



するに畫道の曲技を故らに重視するもので、寧ろ兒戲に近いかも知れぬ。それにも拘らず予が偶々其佩の跡を品鑑し得た因に、彼の指墨法  
の一端を説いて遂に茲に及んだのは、實は予の年來の課題の一、日本  
南宗畫發達史の首章に關して、却つて此の末技に一種の意義を感じた  
が爲に外ならぬ。

素より末流の戲墨に就いては云ふべきで無い。然し日本南宗畫發祥  
期に於ける多くの先覺は抑々何の見るところあつて、指頭を濃墨に汚  
染しながら、此の正派ならぬ奇工を故らに試みたのであらうか。無論  
當代の選ばれたる階級の間には盲目的な唐崇拜の思想の澎湃として横  
流するものがあつた。品海の旗亭に酒を酌んで少しは唐の風が吹くと  
戲作者の擲楡を買つたのは正しくそれで、畫道の上また素より是無し  
としない。彼等は或はまた彼の土の先人の爲すところに、正邪を辨別  
するところ無く、唐繪を以て自ら誇負するの具に供したものが無かつ  
たと云へない。また萬福寺障屏の奇作の如き、たま／＼渡水羅漢の  
題材から、ふと思ひ付いた巨家の一時の戲れであつたかも知れぬ。然  
し彼等南宗の先覺等が我々に遺した筆畫の間に、各々見るがまゝに規  
撫して、暗中模作の多年を繰り返して居る跡を見ると、彼等が何れも  
江戸初世以來誇らかに畫壇を壟斷しつゝ、あつた狩野派的手法、云はゞ  
濕筆を賞用して輕妙の筆技を弄ぶものか、さうでなければ、徒に劔拔  
怒張故らに北宗を誇示するもの等から、如何して離脱すべきかを苦慮  
したことを明に觀取し得るのである。彼等にとつては其れ等こそ却つ  
て曲描きの一種と見えたことは、後來の南宗的畫論の多くが證明する

所で、百川孟浪の跡はまた正しく此の間の消息を語るもの。特に大雅  
の如き、必ずしも傳説的な蕭尺木畫譜を説くまでもなく、恐らく今日  
に遺存する彼の處女作とも見るべき渭城送別圖（恐らく知る人も少いであら  
うが、延享元年、嵐俊明の  
歸郷を送つた方尺に滿たぬ一小品、新潟市高橋高四郎氏の  
藏幅で、天才大雅を最もよく語るものと斷言して憚らぬ。）に只管に支那版畫を撫  
仿してゐる筆畫を見ると、彼がまだどれだけ舊來の薰習に染むことを  
避けようとしたかを示すものである。彼等にとつては少くとも多年の  
間に培養された筆墨の習氣から蟬脱すべき必要があつたのである。指  
畫の奇工また其處に一役を買ふものではなかつたか。かの高其佩の如  
き、また舊來の筆畫の手法を以てしては到底元の四大家にも、また江左  
三王にも、乃至吳惲にも追隨し得ないのを悟つて是れを創始したもの、  
稍々意味を異にするが、筆の習氣を離脱することを試みたことは同一  
である。秉の誌すところに依ると其佩一印を刻して云ふ、筆墨の痕無き  
を求むるに過ぎずと。指畫また曲描きの名を以て弊履の如く捨て、は  
ならぬ。今日の我々の狹量を以て、漫に先賢の試みた所を唾棄するこ  
とは卑むべきである。畫聖大雅は明に版畫と指畫とに彼の椽大の手筆  
の道を拓いた。